

知識の社会史

ピーター・バーク著 (新曜社・3570円)

いつからだったか、「知識」という言葉は「知」に取って代われ、「知」をめぐる言説を多く目にするようになった。「知識の硬直化」という恫喝が奏功し、知の思弁性が表象の技術として語られるようになったのも、ほぼ同じ時期であった。

「知」という言葉の権威性はむしろミシェル・フーコーの翻訳紹介に端を発する。現代思想の文脈では「知」という言葉には、知覚の類型化に対する批判的な思考が含まれている。「知識を「知」という原義に戻して考えることによつて、知識化の過程で排除されるものを可視化するのが目的である。現代人がイメージした「知」は、どのような道をたどつて来たか。そのことを知る上で、本書はわかりやすい入門案内となる。特定の専門分野を横断する記述は明らかにフーコーの思想を意識したものだ。創造的な思索を図るために、

西欧の思考体系から一旦抜け出す必要がある。フーコーのこの考えに対し、著者も基本的には同様の立場を取っている。現代西欧で慣れ親しんだカテゴリーや觀念から距離を置き、近代初期の知識の体系を捉え直そうとしている。ただ、フーコーが特定の主題を通して語

学問分野を超え「知」の組織化に迫る

るのに対し、著者はあえて「知識」という、茫漠たるものと正面から向かい合おうとする。

近代初期のヨーロッパにおいて、知識の体系がどのような過程をたどつて緩やかに変化してきたか、知識人の誕生、知識と学問制度、知識の区分法の変遷、知識と都市空間、知識の中心化や組織化および知識と権力の関係など、多様な視点から検討されている。本書で言う「知識」は通常よりも広い意味合いを持つ。専門知識

のほか、地図、航海指南書から広告、旅行案内、ニュース、見本市報告、商取引の統計にいたるまで、これまで知識として意識されていなかったものも含まれている。

知識の範疇についての概念操作は学説の新奇さを狙ったものではない。既成の学問体系、ものの見方や考え方から自由になるのが目的だ。「知識」の含意のみならず、論証の筋道にも同じ原則が貫かれている。

従来、大学が知的活動を支える空間と見なされていたが、知識の意味を新たに規定することによつ

て、図書館、修道院のほか、書店、珈琲店、酒場ないし証券取引所も知識を媒介する空間として浮上してきた。文化の中心と周辺における知の伝達についても、意外な通路が見えてきた。近代初期の知識はヨーロッパから世界各地に広がっていったと思われがちだが、著者は逆にヨーロッパの辺境から中心へと向かう動きに着目した。その結果、これまで見落とされた歴史の細部に光が当てられたのみならず、知識とそれを仲介する場所

の関係性も解き明かされることになった。

情報が伝達する過程の中で、ヨーロッパの港灣都市は中継地として、地理的な優勢を發揮した。さらに欧州各国の首都は、情報が集まる場所である前に、まず情報を生産する空間であった。近代初期の都市は計算、批評そして総合の中心地であった。さまざまな地域情報や興味の対象が、地図や統計などのような形をとつて、知識として組織された。さらに、印刷物という媒介によつて知識は洗練化され、ほかの場所に移転されるよ

うになる。

知をめぐるさまざまな関係性は、ルネサンスから近代にいたるまでのあいだにすでにその原型があった。権力と知識とが互いに支え合う関係も現代だけのものではない。情報や知識は権力あるいは権威によつて収集され、利用され、また抑圧される状況は十六世紀にさかのぼる。もともと、現代との類似についての探求は、歴史文化の連続説を裏書きするためのものではない。ただ、近代初期から今日ま

で、ヨーロッパの知識の体系が変化しており、その非連続性に注目する必要がある、というフーコーの立場に対し、本書が明確な違いを示したのは間違いない。

密度の濃い内容の割には、文章は読みやすい。スケールの大きい歴史的な眺望、斬新な視点から見たヨーロッパの事物、異文化への目配りも魅力的だが、専門分野のあいだを自由に往来する手際よきも見事なものだ。

フーコーがイメージした「知」との関係性を考えると、書名は「知の社会史」と訳してもよい。ただ、「知」と「知識」を峻別するのは難しい。実際、英語の knowledge はそのどちらにも翻訳できる。現代日本語では二つの言葉の響きが大きく違う。「知識」は物理学の知識、歴史学の知識といったように、具体的な内容を指すことがある。それに対して、「知」は知性であり、優れた能力を連想させる。また、儒学では「知」が理想的な人格の条件とされていることも、想起すべきであろう。そうした文脈を考慮すると、書名の knowledge をあえて「知識」と訳すのも、一つの見識といえるかもしれない。

(井山弘幸、城戸淳訳)